サソリモドキの生態

佐藤井岐雄

(廣島文理科大學動物學教室)

筆者は精子發生時に於ける細胞内有形形質の分裂機構を研究する目的を以て數年前から主として蛛形類を用ひつゝある。キヨクトウサソリ *Buthus martensii* とは相當長い親しみであるが，今年からサソリモドキも用ひて研究するやうになつたので，いつもの事乍らかう謂つた研究には何といつても新鮮な個體を而も多量に必要とするところから採集とか飼育といつた事にもかなり骨を折らされる。そんなところからかうした間には是等の動物からその習性とか棲息場所の狀態など教へられる事もかなり多く，殊に此度はサソリとサソリモドキの兩者の生態を比較觀察する機會にも惠まれつゝある。後者の觀察は日尙ほ淺いので實は今後の觀察に多くのものがあるのであるが，それにも拘らずこの短期の觀察にすら似通つたやうな習性をもつものと思はれるこの兩者の間にも一から十まで似てゐるとは勿論ゆかぬので，それどころか隨分ちがつたところがある事も分つて飼育法にも一段と工夫させられてゐる。此度畏敬する高島春雄氏の需めもあつて，筆を執らうとするのであるが，今回の分は Some ecological notes on the whip-scorpion, *Typopeltis stimpsoni* (Wood) といつたところであり，天草に於ける三月の野外觀察とそれ以後六月に至る室內觀察を主に寫眞によつて解說する事にならう。

今後何年かこの動物の恩澤をうけねばならぬと思ふので，從つて爾後の觀察は是を隨時追記されねばならぬと想像してゐる。かういふところから標題もあゝいふやうに揭げておくことにした。それからなるべく生態寫眞を示したいと思ふのは，かういつた隱遁生活をする動物の生きた姿態は案外見當らぬやうに思ふからである。

サソリモドキは以前は *Thelyphonus stimpsoni* とされてゐたが今日は *Typopeltis stimpsoni* (Wood) の學名で廣く知られる大形異形の動物として珍重がら

れてゐる。一名ムチサソリ，サソリグモの和名もあるが，これは whip-scorpion (英)，Geisselskorpione (獨)，scorpion spider (英) に當る譯名と見てよろしからう。又異名としてシリヲムシを用ふる人もあるが，この他に幾多の方言がある。例へばヘヒリムシ，フフィリャムシ (奄美大島)，ツツパョヤン(德之島) ヘノジョウ (硫黄島)，ヘヒンジュウ (口之島)，ヘヒラムシ (諏訪瀨島)，スムシ (甑島)，ヘゴマ (鹿兒島縣坊)，スダチ (同縣枕崎町小湊) 等で，何れもこの動物の習性の一面をとらへてゐるのは面白い。私が採集に赴く天草牛深では古老達はハカムシといつてゐる樣であるが，この標品を子供に見せると「カンゲキだ」とすぐに答へて樹に多いと云ふ。しかしこれは明かにカミキリムシと見誤つていふのである事は間違ひないところである。

產地 サソリモドキは旣に知られる如く熱帶から亞熱帶の動物で，本邦では奄美大島以南の琉球から臺灣にはまあ普通に產するが，分布上興味ある事に吐噶喇群島を點々と北上して鹿兒島縣の一部に見られ，更に北上して天草島の南端牛深まで見られる事である[1]。而も九州本土に於ける產地は何れも南方と舟運の頻繁な港に限局されてゐる事を見逃してはならぬ。今日知られる所では牛深(北緯32°11′)はサソリモドキ分布の最北の地であるが，この牛深でもその產地は極めて限局されてをる樣に思はれる。私は同町を中心として海岸づたひに數箇所をさがしたが，同じ牛深でも小學校附近を數丁離れた所では，如何に外觀的には格好な棲息地と思はれる所でも私にはその姿を見出し得なかつたので，この點は將來もつとさがさねばとは思ふが多少不思議に思つてゐる。

棲所 三月の牛深に於ける觀察では，サソリモドキの棲所はこれを二つに大別される。一つは粘土質の山の斜面であつて，殊に山に通ずる道路や畑の開墾の爲に切り開かれた山の斜面を注意深く見ると赤禿の粘土の所に小さな孔を發見する。始めはこの孔が何物であるかは全然分らなかつたがこの奥にサソリモドキが潜んでゐるのであつた。この赤土を少し宛崩して行くと奥行はせまいが幅は約 40mm，時に奥行 40mm で長い筒狀の穴を掘りあてるが，サソリモドキはこの中にあの黑茶けた體をくすねたやうにして潜んでゐる。この棲み穴の大きさは丁度自分の體を入るるに足る丈のもので，彼等自身は身動き一つ出來ぬ位

1) 分布の總括的記述は江崎悌三博士 (1940) の本誌 vol. 5, no. 2, pp. 91—98 に詳しい。

のきまりつけの箱穴を掘つてゐるのである。冬籠りをする動物に屢々見るやうな冬眠期に多數個體が集團して一つ穴に土もぐりしてゐるやうな事は決してこの動物では見られぬ。一つ穴には必ず一匹で，この棲み穴もまばらに間をおいて見られるので如何にも孤獨生活をするかのやうである。幼いものはやはりその身體に應じた丈の小ささの穴をうがつて棲んでゐる。かゝる棲所の土質は常に相當の濕氣を含む所に限られ，而も棲み穴の有る山の斜面の上方にはまた草叢が繁つて陰地を造ると共に適當な水分が常に保有される樣になつた場所である。乾燥した土質の所には決して見當らぬ。サソリモドキはこの掘り穴の中に常に鞭狀體を體側に曲げて潛んでゐるので，その鞭狀體の端は頭部に達する位になつてゐる。穴をさらけ出しても蟲は極めて靜かなもので少し位つゝいても動かうともしない。あたかも冬籠中のものと云つた形である。かゝる棲所の觀察は未だないやうであるが，これは恐らく春まだ淺き頃までの狀態ではなからうと思ふ。この棲み穴は散在的にしか見當らぬ事は前に一寸述べたが，それだからかやうな棲所では採集には多くを望めないので私の知つた最も多く得られた箇所でさへ約一間幅の區劃に 7～8 匹內外のものしか見られなかつた位であらう。

もう一つの棲所はお墓場である。そこでは比較的容易に得られる。墓石の下にこれ又自分一つの身體を入るゝに足る丈の平面的な穴をうがつてゐる（第一圖)。こゝでは石と直接に棲み穴は接するから，もはや筒穴を作る必要はないのである。しかしこれでは先に見た山の斜面のよりは多少穴も大きく身體はやゝ自由に動かし得る位の大きさである。一つの石の下面に一匹のみを見出すのが常例であるが，時には 2～3 匹を見る事がある。ここではもはや活動的で，殊に晴れた日などには石を動かすと逃げ出すものに出會ふ事さへ屢々である。しかし曇つた日や氣溫の低い時刻にはじつとしてゐる傾向がある。彼等を最も多く見かけるのは日當りのよくない所で，平地に近い水濕のある附近の石の下面である。ナメクヂやカタツムリが棲むやうな少し濕つた所を彼等は好むらしい。日當りの良い石の下面に見る事はめつたにないといつても差つかへないので，かやうな所の石をひき起すと定まつたやうに體の前緣が白く限どられたサツマゴキブリ *Opistholatia orientalis* Burmeister がカサカサといつたやうな音をたてゝ急ぎ逃げ出すのに廻り會ふ位のものである。

雌雄比　かういつた棲所で早春既に成大者から幼者まで大小種々のサソリモドキを採集し得るが，之等は大體 13〜15mm位の幼者と 18〜25mm 位の中位のものと 40mmを超ゆる成大者の3通りのものに大別し得られる。3月下旬では 13mm以下のものは見かけなかつた。



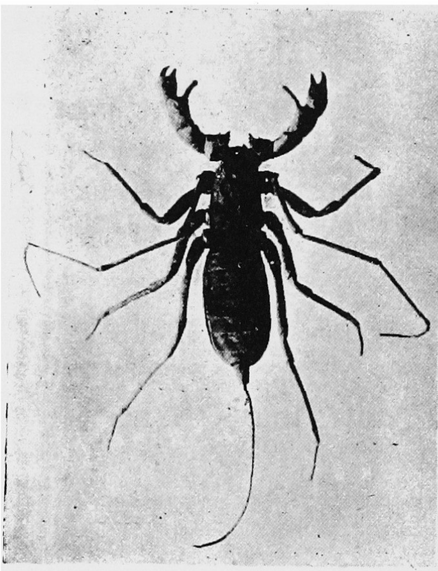
第1圖　棲所に於けるサソリモドキ
石の下面に掘られた棲み穴中に潜む．上方の一匹は18mm大，下方は38mm大．(佐藤原圖)

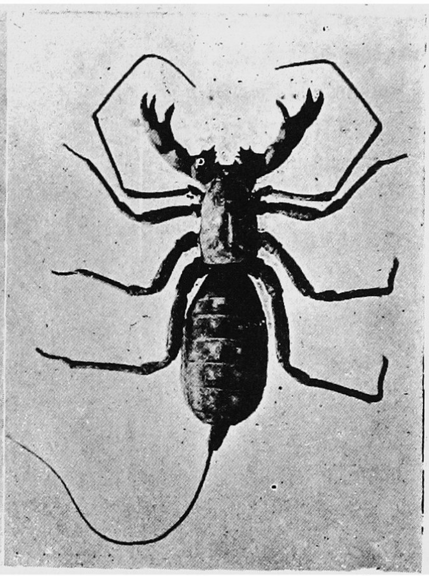
サソリモドキの成體は雌雄で形を異にする（第二圖〜第五圖)。その外觀上の主なる相違は，1）雄には觸鬚の脛節にある内側突出はその先端が特別に肥厚膨大し且つ強く内側へ彎曲するが，雌ではこの内側突出の先端は鋭尖であり且つ雄ほどは内曲してゐない。2）又觸鬚の轉節内側の齒狀突起は，雄では小且つ比較的鈍に終るが，雌では著大且つ鋭尖である。3）雄の腹部體節は何れも略同大の幅から成るが，雌では腹部前方の2,3節は狹小なので頭胸部との堺のくびれを寫眞でもあざやかに見られる(第三圖，第五圖)。

かやうな性徵は 35mm以上のものでは極めて明瞭で容易に雌雄を區別し得られるが，これ以下の個體になると雌雄の別を外部より知る事は困難で，これら

は外見からは何れも雌のやうな形態を示してゐる。

三月に於ける成體の出現は少いと言へるので，數日の間に恐らく 400 匹以上も採集したであらうが（III. 19—20, 22—23），この中に僅かに 46 匹の成體を得たのみである。その雌雄の割合は雄 15 匹，雌 31 匹であつた。如何なる理由によるものか雄が少い事は不思議であつた。伍獻文氏は南京の靈谷寺で 1935 年の十月にこの同種のサソリモドキ 11 匹を採集してゐるが，これでは雄 5 雌





第 2 圖　サソリモドキ　雄　×ca $\frac{3}{4}$　　第 3 圖　サソリモドキ　雌　×ca $\frac{3}{4}$

（佐　藤　原　圖）

6 であつたと報告[2]してゐる。恐らく暑夏に向ふにつれ略同數に雌雄を採集し得られるやうになるものと想像してゐるが，これは推量の範圍內で今のところ何とも云へぬ。雌雄の出現率が時季によつて相違する事は他の動物でも報告された例もあり，その理由に就いて考察されたのもあるが，このサソリモドキの場

2) Wu, Hsien Wen 1936 A Review of the Scorpions and Whip-Scorpions of China. Sinensia vol. 7, no. 2, p. 127.

合についても今後充分注意すべきものと思ふ。

食性 自然の棲所に於ける彼等の食餌動物は如何なるものか全く知るところがない。これはひとりサソリモドキに限らず此類一般に就いて言へるやうである。

サソリモドキの採集に際し私が見た彼等の住居は常に奇麗な事であつた。又假にこの住居に彼等の食滓らしきものを見出したとしてもそれは恐らくかやうなものから食餌動物が何者たるかを見極める事は殆んど不可能な事であらう。私の野外觀察で知るところは只一回カタツムリの一種（種名未詳）の肉塊を食ひつゝある所を白晝に目撃した事があるのみである。

飼育下のサソリモドキに私の試食させた食餌動物の中，彼等の食物として完全に攝食されたものは今のところ次の如くである。

イヘバヘ *Musca domestica*

ヒメイヘバヘ *Homalomyia canicularis*

キンバヘ *Lucilia caesar*

ウヅキドクグモ *Lycosa T-insignita*[3]

ワラヂムシ

一般にサソリは小食性である事は古くから知られる所である。私自身のキョクトウサソリに於ける經驗でも蠅や蜘蛛を一ケ月に數匹でもよかつたのであり，數ケ月間食餌を與へなくても極めて元氣に活動して居つた。又古い記錄[4]にもキョクトウサソリの餌は1ケ月で小豆大の蜘蛛二疋を以て足りると書かれたのもあり，Fabre も歐洲產のサソリ *Buthus occitanus* の“活動力を無くなすには，九ケ月間の絕對的斷食を必要とした[5]”と述べてゐる位である。

サソリモドキの飼育當初には，私はサソリモドキもサソリ並みのものとして食餌を少しか與へておかなかつた。ところがこれはどうであらう！彼等はこれでは全く足りなかつたのである。忽ちにして共喰によつて腹を滿す事に出會つてしまつた。サソリモドキは案外に貪食である事を其後の飼育から知つた。此頃はサソリモドキ一匹に對し每日蠅や蜘蛛6～7匹當りにはなるやうに給食してゐるが，これを1日か2日怠つても共喰を始め必ず一匹は犧牲に供せられる。サソリモドキは體液に富んだ肉質の多い方を好むかの如く見える。彼等の

3) 植村利夫氏の同定を經た。

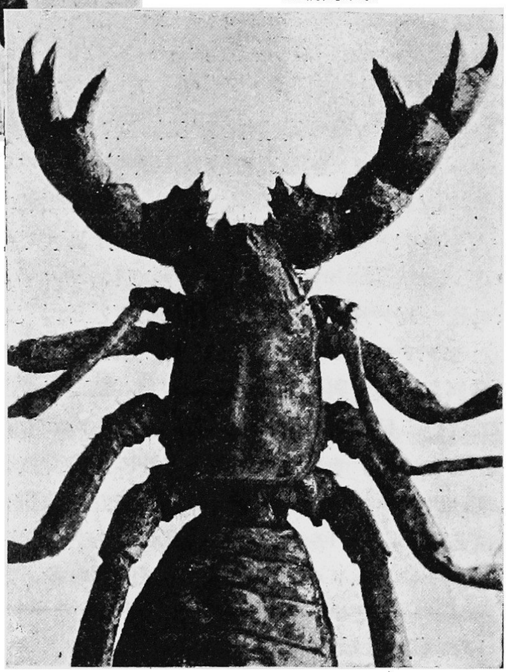


第4圖(上)サソリモドキ 雄 ×2
(佐藤原圖)

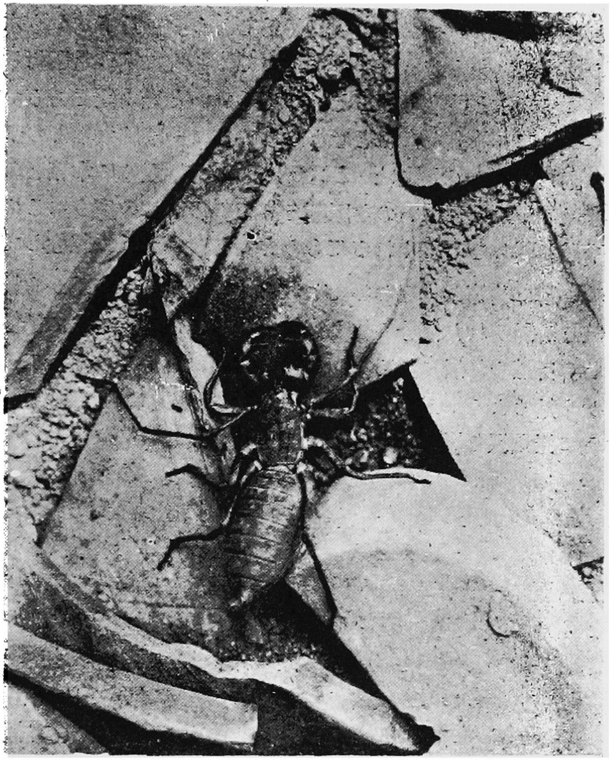
食性的活動はサソリと同様一日中ではやはり夜間が主であるが，併し白晝でもよく捕食するもので，この點はサソリよりも頻繁なのを見る。

共喰行爲 サソリの共喰行爲に就いては，Fabre の歐洲產 *Buthus occitanus* に於ける有名な觀察記の中に見える。このサソリでは，交際季にその目的を達した後，屢々雄サソリは雌サソリの爲に食はれるのである。而も何時も頭の方から食ひ初められて殆ど雄サソリの全身を雌サソリは食ひ盡してしまふが，後腹部だけはつぶしきれないで捨てられる。かやうな共喰行爲は交際季に限るものの如く，この時期以外の同種間内の共喰は見られない樣であり，又この事は他種のサソリでも左樣であらうと想像されてゐる。

第5圖(下)サソリモドキ 雌 ×2
(佐藤原圖)



キヨクトウサソリでの私の飼育觀察によると，雄サソリが屢々減じてゆく時季があつて，その頃には屢々固い尾腹部のみが飼育箱中に哀れな殘骸としておかれてゐるのであつたが，其他の多くの季間にはさやうな事は決してなく雄サソリも雌サソリも何れも共喰されたやうな形跡に出會ふやうな事は無かつた。ひとときなどは數ケ月間も小さな飼育箱中に雌雄同數に計二十數匹も入れておいた事もあるが彼等の間に爭鬪行爲のあつたやうな證跡をあげる事は出來なかつたやうに記憶してゐる。之等は Fabre の觀察と一脈相通ずるものがあるやうに思ふ。但し私はサソリの共喰行爲を熟視した事はないので，頭から食ひ始められるものなりや否やを語るだけの資料は何もない。然し食ひ殘された部分が何時も固い尾腹部であり，稀に前腹の一部が殘つてゐても何時も尾腹部が附着しておつた事は間違



第6圖　棲家のサソリモドキ　雌
鋏と第一步脚と鞭狀體に注意.
第7圖と比較御覽ありたい.　（佐藤原圖）

---

4) 動雜 vol. 8, no. 88, p. 67

5) 森達夫・山田吉彥譯. 1931. 昆蟲記 XVIII, p. 70.

ひのないところである。かやうな所から考へて，サソリでは（1）交際季以外には共喰行爲はまあ見られないのが通常である.（2）少くとも雄が雌にどうもやられるらしい,（3）體の前方から食はれるもののやうである——といふやうな事は云はれるかも知れぬ。

ところでサソリモドキの共喰行爲である。三月下旬から六月下旬に至る飼育下の観察ではあるが，サソリモドキでは共喰は案外常習行爲のやうに見える。食餌に飢ゑると共喰をやるといつてもいいと思ふ位である。前にも一寸觸れた如く一日二日給食を怠るときまつたやうに一匹は犠牲となつてゐる。私の飼育箱は直徑 30cm の圓鉢と 25 × 18cm の金網張りの木箱との兩者で，何れにも四匹以下しか入れないのを原則としてゐる。この廣さにこの個體數なれば，まあ平穏な暮しをしてくれるだらうと飼育者は勝手に想像してゐるのである。

狹い所に彼等を數匹おいてしばらく彼等の一般行爲から観察して見よう。瓦の破片が置かれた自分の住み家に蟄伏してゐる時の彼に就いては別にいふ事がない。自然の住居に見ると別にかわりはないのである。二匹が偶然に邂逅した所から始めよう。二匹は出合頭に尾狀の鞭をピンと張つて相手を威嚇するかのやうに鉗を振り翳す。しかし大ていの場合はこのまゝで左右に別れて急ぎ住み家へ逃げ去る。しかし眞近かに二匹が頭をつき合はすやうな事があつたとすると，互ひに威張つたやうに左右に開けた鉗をつき出して鉗と鉗をかち合せつゝ小競合といつた一時がある。こんなことがしばらく續くが，大抵の場合兩者は左右に別れ，せかせかと隠れ家へ逃げ込む。時にどちらかの一方が相手の體側をかすめてすれ違ふやうに別れる事もある。しかしかうした時に別れ去らうとするどちらかを怒らして見ると又々鉗を振り翳して如何にも怒りつぽくなつて棒切れにつゝかゝつてくるのが屢々である。かうした作爲的なケシカケを二つのサソリモドキに行つて私は一度とうとう一匹を失つた事がある。例の如く鉗を左右に大きく開いて相手の體側とすれ違つた直後もう一度追ひ返したところ，追ひ返された一匹は相手の鞭狀體をしつかり銜へたのである。この先の観察を記す前に茲で少しサソリモドキの行動の際に於ける體の附屬器の一二の動きを注意しておかう。

サソリモドキが棲み家にじつとしてゐる時は尾狀の細長い鞭狀體は地上におかれた儘か，少し斜めに持ち上げられた程度である（第六圖)。ところがその

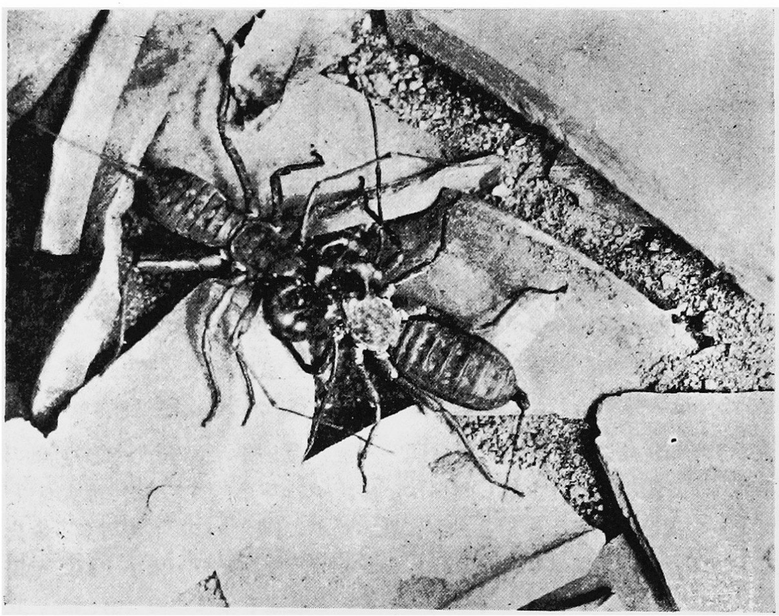
住居の瓦屋根を除けた時に最初の身構へは實にこの鞭狀體で，サツト直上さすのである。それから一度步行するとなるとこの者は實に微妙な動きをなす。サ



第 7 圖　棲家から這ひ出たサソリモドキ　雄
直立した鞭狀體，左右に開いた鉗，第一步脚の位置.
第 6 圖と比較御覽ありたい.
（佐　藤　原　圖）

ソリモドキの尻尾に長く引いた鞭狀體――鞭狀體と書いたのではこの動物の習性を描寫する際にはどうも感じが出ない事が多いので，便宜「鞭の動き」と言つたやうな使ひ方をする事もあらうと思ふが，これは少しでもその實際を忠實に表はしたい爲のものにしか過ぎぬ。この鞭は前後・左右・大小それこそ自由自在に動かされる。步行する時は大ていピンと直立させてゐる（第七圖）。立どまつた時など大きな振を一・二度やる事があると思ふと雌雄が出會つた時などは兩者共に體と垂直になるまで高々と上げて細かな振りを繰返す。私は屢々雄サソリモドキと雌サソリモドキを會合さすやうに仕向けたし，又雌と雌　雄と雄，これも出會はして見たが向ひ合つた兩サソリモドキは直上させた鞭をいと

も細かに振はす光景は「妙」を得てゐるといふ辭以外に一寸言ひ表はし得ない(第八圖)。雄サソリモドキと雌サソリモドキの邂逅の場合が一番こまやかであるなどとはここには言へない。かういふ細かい鞭の動きは棒切れなどでつゝいた直後には決して見られぬので，二匹を會合させてからしばらく經た後からやつと細かに振ふのである。サソリモドキの鞭狀體は色は赤茶で細長く，體長40 mm 位のものは 45～50mm 位の長さの鞭狀體を持つてゐるのが通常である。後端にゆくほど細く色も淡くなり先端の數 mm 位は透かして見える位の淡さであり，それに鞭全體が多數の帶黃白色の節々から成るので，振動さす時は一層美しく見える。彼の背越しに曲げて，餌物を螫し殺す毒袋を擔つたサソリの太い尾などの場合を想像してはとんでもない事である。



第 8 圖　邂逅したサソリモドキの雌雄
向つて左が雄，右は雌．「鞭の動き」と第一步脚の位置，それから觸れ合せた鉗．步脚と脚のおかれた物體との距離は影によつて大體想像されやう．
(佐　藤　原　圖)

兎も角も，この「むつつり屋」の體中ではこの鞭狀體が觀察者にとつては第一等の品物なのである。鞭の動きがこの者の身上だと云つても誰からも抗議を受けないだらう。それほど時と場所によつていろいろな微妙な動きを見せる。

この鞭狀體に次いで，もう一つ大事なものがある。それは第一歩脚である。サソリモドキではこの第一歩脚は脚といつた形がさつぱりなく，細長い鞭狀に變形して居り，實際步行に使はれる事もない。大ていの場合　瘦腕の肘を張つたやうな格好で持ち上げ氣味にして休んでゐるが，步き始めるとこの鞭狀の脚を前方へつき出して，左右を交互に動かしたり，何かまさぐるやうな格好にこの鞭脚を振り廻はしたり，この動きが又妙なのである（第七圖)。この第一歩脚は觸感を司るもののやうに見える。

二つの變つた附屬器のことでかなりの說明を費したが元へ戻らう。彼の自在に動く鞭狀體が因で食はれてしまつたといふ悲劇を物語りつゝあつたのである。この動物にはこの鞭狀體を掴まれることは相當な打擊に相違ないらしい。私が作爲的に追ひ込んだ一匹によつてとうとう尻尾を捉まれた他方は，この鞭狀體の部分から食ひ始められて倒れてしまつたのである。この時の有樣をもう少し言ふと，兩つの觸鬚を左右に大きく開いて襲ひかゝり，一方の大鉗が後腹の一側をおさへるやうに置かれた瞬間に，旣に口は鞭狀體の後方より 3 分の 2 あたりの所に噛みつかれてゐたのである。すばやい動作で口器は腹部末節の小さい圓柱な節に及び，兩方の大鉗で下腹をとらへるやうにしつゝ食ひ始められたのである。かうして哀れにもこの一匹は翌朝まで頭胸部の堅い部分のみは殘されたがきれいに食はれてしまつた。

上に述べたのは作爲的になした結末であつたが，かういふ事なしに兎に角，自然の儘の形で放置しておいた飼育箱中のサソリモドキにも鞭狀體丈を失つた個體を見ることがある。それどころか全く食了された犧牲者を發見するのである。

飼育下に於て共喰されるサソリモドキは私の今までの觀察では何時も雌のみであつた。サソリモドキの雄は雌に比べると體も小さく華奢であつて（第二圖，第三圖)，見たところでは雌よりは强さうには思はれない。ところが雌が何時も斃されてゐるのである。雌 4 匹雄 1 匹を入れおいた飼育箱中に於ても雌が次々に 2 回やられた。その他に今までに共喰された他の數匹も皆雌のみであつた。

觀察例は決して多くはないのであるが，兎も角も雄が犧牲にされた例は今までのところ見ない。更に興味深く思ふのはサソリモドキは常に體の後方から喰はれてゐるといふ事實である。共喰によつて斃れた殘體を見ると何時も頭胸部から前方のみが食ひ殘されてゐるので，大てい第三步脚の附根から後方が食はれてゐる。固い頭胸甲や觸鬚の變形した鉗には異常を認めないのが常である。時に頭胸部の腹面はかなり上方まで食ひ荒されてゐるが，背面の頭胸甲はそれから先に擔ふ鉗と共にそつくり殘されてゐるのもある。兎も角，サソリモドキでは何時も內臓に富んだ腹部丈は完全に食了される事丈は確かで，後方から食ひ入つてゐる事は疑ひないところである。サソリの前方から始めて後腹を食ひ殘すのとは反對なのである。上述せる觀察からサソリモドキでは，（1）共喰は同種間に於ても割合頻繁に起るもので，これは食物關係からも起り得るものであると考へられること，（2）雌が雄に食はれてゐる（3）體の後方から食はれて頭胸部や觸鬚の如き堅固な部は捨てられる，といふ事がいへる。但し（2）の項は交際季に於ける問題と共に尙ほ後に待たねばならぬものが多い。

防禦行爲　サソリモドキが强い醋酸臭を發する事はかねがね聞き及んでゐたことであるが實地にあたつて見るとまことに聞きしに勝るものがある。これは腹端に開口した腺よりの分泌物によるものであるが筆者の觀察したところを次に記す。

その棲所に於て彼等を捕へんとすると，サソリモドキは例の大鉗を左右に開き，第一步脚は前へ高くつき出され，鞭狀體はピンと眞直ぐさせて，恰も威嚇するかの如き擧措をとり，如何にも怒りつぽく鞭を强く且つ大きく振ふ。これに恐れをなさずサツト手を下すと，その途端に腹端から液が奔出して飛沫を浴び，强い醋酸の臭が鼻をおそふ。同一個體に就いて實驗するに，かゝる液の發出は通常相ついで二回位なすが，それ以上行ふことは稀である。定量研究は未だ行はぬがこの奔出する液の量はかなりのものである。この液は多少紫藍色を帶びた透明液である。

サソリモドキの腹部末端の節は可動的であるからこの分泌液はかなり任意に外敵の來る方向へ奔出せしめ得るものの如くである。數寸も奔上せしめる事がある。生殖腺を取出す必要上，生まの儘，この動物を解剖臺上におき處理せんとする時，私は度々この奔出液の洗禮を受けるのであるが．ピンセツトを持ち

至ると鞭狀體をピンと差上げ，同時に鞭狀體の附根の腹部末端の節を上方へ差上げてゐるので分泌液は奔上し，その高さは確實に 20cm 以上には達する。處作中の私の眼に飛びこますのであるから確かなものである。この飛沫を顏に浴びると皮膚が走つて，ヒリヒリと痛く數分間はこの痛みが續く。何時もこの程度で洗面するのでその先は未だ試してないが，洗面後もしばらくは走るのであり，眼中に飛び入つたりすると相當の痛さであるから，かなり强度の酸であることは否めない。數匹いぢつてゐると鼻もやられ勝で，私は何時もマスクをはめて仕事する事にしてゐる。奔上したこの分泌液の飛沫は直徑 35cm 位の範圍には四散する。この分泌液は前にも言つた如く固定に常用する氷醋酸をかぐのと一寸もちがはぬ香を有して居り，解剖に際し屢々生殖腺はこの液で酢漬にあつたやうにもなる。私の生殖腺の細胞學的研究にはこの分泌液は見のがし得ない密接な關係があるので，研究材料摘出後，性細胞を生體觀察する際にも固定液の處法にも特別に骨折つて研究してゐる譯である。しかしこの事は本論には直接の關係がない。

兎も角もサソリモドキがこの强臭ある分泌液を奔出するのは危害を加へられんとする時になすことは疑ひないやうである。同じ仲間と出會つた際とか又食餌動物を與へて輕い實驗をしたやうな場合とかには未だ一度もこの分泌液を奔出する樣な事を見たことがない。サソリモドキが外敵への防禦は，强大な鉗と腹端から奔出する强い醋酸臭の液とが主なるものであり，而も腹端が可動的な小圓柱狀の節から成る事はこの防禦行爲に有力な役目を演ずるものとして記憶せらるべきものと思ふ。

飼育餘談 「これはむつつりしただまり屋，暮し振りは人目を忌み，つきあつても座興のない蟲。そのために記述と云つては解剖學上の事柄をおけば，まあ何もないといつてよい」[6]——といふ一節は Fabre がサソリの觀察記を物すにあたつて冒頭に喞つたところである。同じことはサソリモドキにも云へるのであるが，飼つて見るとこのサソリモドキも少しは座興がある。さういつた座興の幾つかを述べたのであつた。就中「鞭の動き」や第一步脚の運動に惹かれる所が少くなかつた。挿入した寫眞（第六圖，第七圖，第八圖）にはこの鞭の動きや

---

6) 林・山田譯．前出 p. 43.

第一歩脚の動きの種々な姿態があらはれてゐる筈なのであるが，所詮これは動かざる像にしか過ぎぬ。嘗てさる日本畫壇の大御所が，「かつて外遊した時に汽車の窓から競馬の看板を見た。その看板は寫眞を土臺にしたものであるが，實によく出來てゐた。その時ふと考へたのは寫眞は如何に精巧に出來てゐても馬を寫した瞬間は靜止してしまつてゐる。畫を以てこの靜止のない――常に動いてゐる様を描いて見たいと思つて心掛けてきたことがこの畫です」といつたやうな意味のことを，ある美術記者に語つたといふ。その通りで，殊に，ほそい鞭の，細かな所作事など到底寫し出されるものでもない。しかし見るものよろしくその心算でピンボケにあらざるピンボケの中にその「動き」の様を看取されんことを。かういふ餘談は全く彼の座興を少しでもひきたててやりたい爲のものでしかない。

ところで最後にこの動物を飼育箱に持ち來すまでの輸送小話を綴つて，この珍動物を今後生かして持ち歸らうとする人々の爲に參考に供し，この小篇を結ぶとしやう。

元氣ものに似合はずサソリモドキは案外にもろく生かして歸ることはなかなかの困難である。私の經驗ではサソリの比でない。牛深から富岡町にある臨海實驗所までは自動車で5～6時間の所ではあるが，採集罐に少し多數を入れて運ぶと小さな個體などは大部分お陀佛になつてしまふ。せいぜい數匹といふ少數個體を小孔を多數うがつた木箱にでも入れて持ち運ぶと先づ大丈夫であるが，これでは少し纒つた數を必要とする時は自然と輸送箱を多數要し，嵩ばつてくるので不便此上もない。それに箱や罐の中では屢々共喰をやるし，一番困る事は輸送途中の動搖が因でこの動物特有の强い醋酸臭の液を多量出し，その爲に小さな個體など殆んどすべて斃れるものである。私が一番安全に敎室まで持ち歸つたのはガーゼの袋に入れたものであつた。種を明せばなんでもないのであるが，この法が一番簡單で且つ嵩ばりもせず，一寸注意をすれば幼者でも元氣に遠距離までも運ばれる。35×20cm 位の袋に成體でも12～3匹位迄は入れても大丈夫である。このガーゼ袋なれば輕くもあるし，自由に疊まれもし，こんなのを數個重ねても大丈夫でどこへでも納まつてくれる。一番輕便な輸送法かと思ふが，私は近く又出かけて來ようとしてゐるので名案があつたら切に御示敎を願ひたい。

筆を擱くに當り，採集に研究に多大の御好意と御援助を賜はりたる天草臨海實驗所長大島廣博士に厚く感謝の意を表する。馬場菊太郎博士には同所滯在中終始御厚情を忝うし且採集にも東道の勞をとられた。玆に銘記して謝意を表す。又種々有益な御示教を賜つた江崎悌三博士，池田隼人博士に厚く御禮申上げる。

日本產全蠍目及脚鬚目知見補遺*

高　島　春　雄

（東京文理科大學動物學教室）

§南　洋　の　蠍

學友關口晃一氏が東京高等師範學校南洋研究團の一員として1940年12月15日山城丸で橫濱を出帆されるので內南洋產の蠍の採集を，出來ればカニムシモドキも採つて來て下さる樣にお願ひして置いた。今年1月20日氏は恙無く且つ多數の多足類及び蛛形類標品を携へて歸京された。其等の標品中全蠍目及び脚鬚目關係の4瓶を予に提供された。御依賴しては置いたものゝカニムシモドキ採取に成功することは餘り期待出來なかつた丈に，それを3頭も採取し且つ予には新しい知見を得させて下さつたことを深く感謝致さねばならない。4瓶の內容はヤヘヤマサソリ10頭，カニムシモドキ3頭である。

ヤヘヤマサソリ　*Liocheles australasiae* (Fabricius, 1775)

25. XII. 1940 コロール島アルミス村にて朽木の樹皮下より幼1頭．1941年元日パラオ本島淸水村より朝日村に至る間樹皮下より成雌1頭，6. I. 1941 アルミス村にて石下で成幼共8頭を獲られた。元日に獲た成雌は背甲長 7.5（單位粍），背甲幅 7.5，腹部長 40，腹部幅 9，大腮長 4.5，觸鬚長 26，第1步脚長 13，

---

* 本稿內容の一部は10月中旬仙臺市に於ける日本動物學會第17回大會席上江崎悌三・高島春雄により「本邦產脚鬚目知見」の題下に講演せられる。